

## 五郎太のこと

もう八年も前のこと、沖縄の石垣島空港で確かに彼の名前を聞いたのだ。「三枝さん、三枝さん」と呼び出しがあり、しばらくして「三枝五郎太さん」と今度はフルネームの呼び出しだった。私は一階に下りて受付カウンターに走った。しかし、彼に会うことはできなかった。(三枝は仮名)



もう七十年も前のことである。昭和十九年、私は横浜の六浦国民学校の二年生だった。戦争が激しくなつて食糧不足となり、子どもたちはみんないつもお腹を空かせていた。そんな時、級友の五郎太のお父さんが戦死した。お母さんは病気ですでに亡くなつていた。今思えば名前からして何となくヘンだが五郎太は一人息子だった。日曜のお昼どき、窓から家の中を覗い

この写真は著作権の関係のため表示できません。写真は冊子でご覧になることができます。担当営業までお問い合わせください。

ている彼に母は食べ物を与えていた。彼は身寄りはなかった。近所の人たちがめんどうを見ていたが、五郎太はいつも汚く痩せていた。

学校の近くのお宮さんでよく遊んだが、境内には大きな銀杏の木があった。その根元で不良からいじめを受けたことがあった。私を助けようと小さな五郎太が突進してきた。二人はまとめて叩きのめされ、オイオイと泣いた。境内を敷きつめた銀杏の葉の黄が鮮明に記憶に残っている。

彼は学校に来なくなった。横浜の町のガード下に住む浮浪児(当時はそう呼んでいた)になったという噂を聞いた。空襲で焼け出され、両親を失った浮浪児は数を増していった。

父の里、富山県の魚津に疎開した私はその後、横浜のことはほとんど忘れてし

まったが、銀杏の葉が色づき始めると五郎太のことを思い出す。



五郎太は生きていたのだ。石垣の青い海に彼がふと浮かんだ。胸が熱くなり、涙ぐんでしまった。

先日、横浜の小学校を訪ねてみた。ちようど運動会の日だった。五郎太に似た小さな児童がはち巻きをして目の前を走つていった。

あのたくさんの浮浪児はどうなったのであろうか。そして中学を卒業して都会へ集団就職をしていったみんなはどうしているのだろうか。貧しくてもみんなやさしかった。日本の高度成長を支えたのは、三月、毎日のように駅で見送った集団就職の彼らだと思う。

ちよつとおそすぎるかもしれないが、彼らみんなの幸せを祈つてやまない。



株式会社インテック  
最高顧問

中尾 哲雄